

臨床・教育・研究に励み、
人々の笑顔に還元したい。

健康医療科学部
医療貢献学科
言語聴覚学専攻
教授

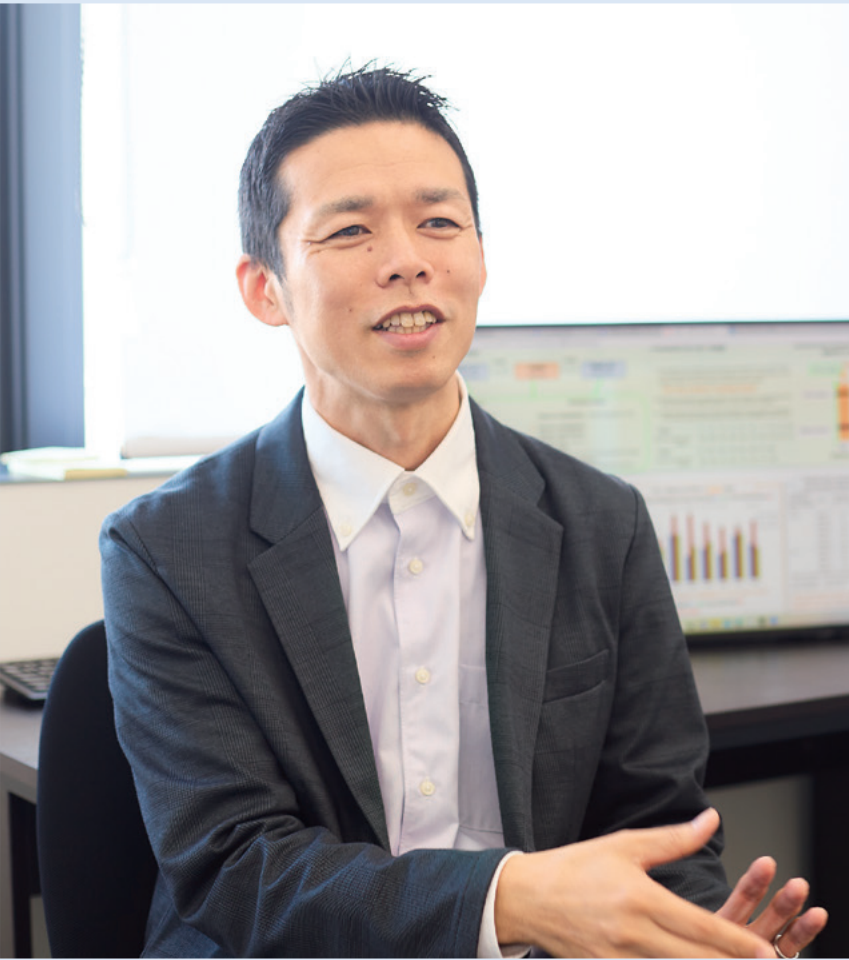
志村 栄二

【学 歴】

2002年4月 国際医療福祉大学保健学部言語聴覚障害学科 卒業
2007年3月 中京大学情報科学研究科認知科学専攻修士課程 修了
2012年3月 中京大学情報科学研究科情報認知科学専攻博士後期課程 修了

【職 歴】

2002年4月 医療法人樹心会角田病院リハビリテーション科 言語聴覚士
2007年4月 新潟医療福祉大学医療技術学部言語聴覚学科 助教
2014年4月 愛知淑徳大学健康医療科学部医療貢献学科言語聴覚学専攻 常勤講師
2015年4月 愛知淑徳大学健康医療科学部医療貢献学科言語聴覚学専攻 講師
2019年4月 愛知淑徳大学健康医療科学部医療貢献学科言語聴覚学専攻 准教授
2020年4月 愛知淑徳大学健康医療科学部医療貢献学科言語聴覚学専攻 教授
(現在に至る)



医療・福祉の道を志した志村先生は、言語聴覚士として22年、臨床の現場に立ち続けています。ことばや飲み込みに障がいのある方々と向き合いながら、大学では教育・研究にも尽力。学生が専門性を養うだけでなく、自ら学び続ける力も身につけられるよう授業づくりや指導を工夫し、障がいのある方々に寄り添う医療人の心も育んでいます。

私が専門としている「発声発語障害学」は、話ことばに障がいのある人に対して、より良いリハビリテーションを考える学問です。話ことばの障がいには、吃音・音声障がい、構音障がいなど数種類ありますが、私は成人の構音障がいのある方を対象にしています。

構音障がいは、脳梗塞などの疾病を起因として、呼吸、喉(のど)、顔面、舌などの発声発語器官に運動障がいが生じ、その結果、発話障がいが起こります。軽度の方では呂律が回らず少し不明瞭な発話になる程度ですが、重度の方では声を出すことさえ難しく、透明文字盤により視線で意思疎通を図る場合もあります。

構音障がいを有する方は、国内に70万人前後と推定されています。その多くの人は、発症後数か月は機能的な改善(たとえば、運動麻痺などの改善)が見られますが、徐々に緩やかになり、やがて止まります。しかしながら、残された機能を活用して明瞭に話す方法や代替手

段により、伝達能力やOOL(生活の質:Quality of Life)が改善することも少なくありません。私は、主に後者の明瞭に話す方法や代替手段についての研究を進めています。

また、私たちが食べたたり飲んだりするときにも発声発語器官を使うので、摂食嚥下障がいも高率に合併します。加齢に伴い摂食嚥下機能も低下するので、このリハビリテーションも重要です。

両分野ともに、どのような方に、どのようなリハビリテーションが効果的なのか、ということについては不明なことが多く、少しずつ根拠(エビデンス)が蓄積されている状況です。

言語聴覚士の数はまだまだ不足しています。障がいを有する多くの方に質の高いリハビリテーションが提供されるように言語聴覚士の養成に尽力し、同時にこのような障がいのある方にとって、直接利益になる研究を続け、少しでも社会に貢献できたらと考えています。

志村先生の主要論文

- Dysarthria例における携帯型DAFの有用性―使用時および非使用時の効果検証―
音声言語医学 61/4 3331頁―3411頁 2020年10月
- Dysarthria例の会話分析とリハビリテーションへの応用可能性
コミュニケーション障害学 32/1 63頁―70頁 2015年4月
- Dysarthria例の発話速度調節訓練に影響を与える要因の一考察(第1報)
音声言語医学 53/4 3002頁―3111頁 2012年10月
- Temporal performance of Dysarthric patients in speech and tapping tasks.
Conference Proceedings 12th Annual Conference of the International Speech Communication Association 516頁―519頁 2011年09月
- Dysarthria例の発話特性における遅延聴覚フィードバック(DAF)の効果
―運動低下性タイプ以外に対する検討― 音声言語医学 52/3 2233頁―2411頁 2011年7月

